

第十二回 邦 樂 演 奏 会

| 邦 樂 名 曲 選 |

'82 都民芸術フェスティバル

昭和五十七年三月七日(日)

第一部 十二時半開演 四時終演  
第二部 四時半開演 八時終演

第一生命ホール

後援 東

京

都

(五十音順)

社団法人 日本三曲協会  
中央区銀座六の十二の二の四〇二  
電話(五七一)八七五六番

港区赤坂二の十五の十二の四〇三  
電話(五八五)九九一六番

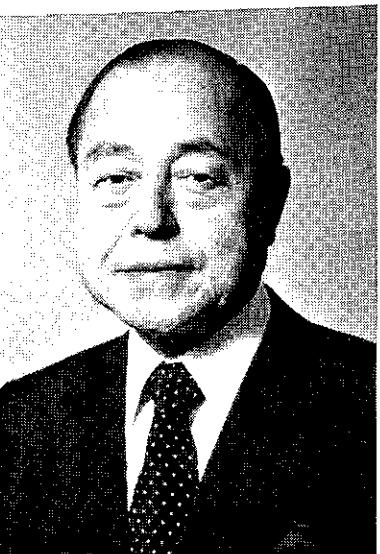
新常磐津協会  
品川区旗の台六の二十七の二  
電話(七八一)三九五五番

清古元内協会  
中央区銀座八の十四の三松本ビル  
電話(五四二)五四七一番

財団法人 清古元内協会  
電話(五七一)〇二一六番

主催邦楽連合会  
社団法人 義太夫協会

電話(四〇二)〇二四〇番



第十二回

邦楽演奏会に寄せて

東京都知事 鈴木俊一

「都民芸術フェスティバル」は、昭和四十三年度に発足以来、本年度で十四回目を迎えることになりました。

このフェスティバルは、東京都が芸術文化団体の行う公演に対して、その費用の一部を補助し、優れた芸術を、安い料金で、多くの都民の方々に鑑賞していただくことを目的とし、毎年一月から三月にかけて開催してまいりました。今では、公演の種目も当初の六種目から十二種目まで拡大され、都民のための芸術的一大祭典にまで発展しました。

このところ、日常生活のなかで生活のうるおいや心のやすらぎを大切にする風潮が顕著になつてきております。私は、これまでにもまして、都民のみなさんの多様な文化活動を促進するための条件整備に努めてまいりたいと思います。

その一環として、都民の方々たの芸術鑑賞を側面から援助し、一人でも多くの方がたが、優れた舞台芸術に親しむ機会をもつことができますよう、「都民芸術フェスティバル」を一層充実させていきたいと考えております。

本年度も、このフェスティバルが都民のみなさんにとって心にのこる楽しい催しになれば幸いです。フェスティバルに参加し、その一翼を担ってくださった邦楽連合会の力一杯のご活躍を願っております。

第一部 番組（十二時半開演）

一、長唄元禄風花見踊（花見踊）

唄東音 岡島梅子  
和半竹浅大森多津子  
根内見文子  
谷中岸山田昌淳  
龜田林根和歌  
みどり郁典邦富穗恵子  
子子子子

三味線東音

伊多鈴子  
加木村勢  
皆秀太小新下  
川島田竹井川村  
清いづみ水子  
ちあき江保子  
雅子子生

囃子

笛小鼓  
太鼓同小鼓  
藤望堅福原喜百之助  
舍月月喜三久助  
呂太左喜三郎  
意次郎  
雪

二、義太夫 新吉原揚屋の段（宮城野信夫）

幕太平記白石嘶

宮城野竹本春華  
信夫竹本春華  
鶴賀德之助  
鶴賀德之助  
土佐廣

三味線

豊澤仙廣

三、新内明鳥夢泡雪（雪責）

淨瑠璃  
淨瑠璃  
鶴賀德之助  
上調子

三味線

新内仲三郎  
勝史郎

四、常磐津恩愛贖閔守（宗清）

淨瑠璃  
常磐津清勢太夫  
常磐津清若太夫

三味線

常磐津常磐津

同 同 浄瑠璃  
常磐津常磐津  
常磐津清勢太夫  
常磐津清若太夫  
上調子  
常磐津常磐津  
常磐津常磐津  
八百二八百  
文字兵衛

富山清琴作曲

五、箏曲新早さらし

同 同 三絃  
富 富 富  
山 山 山  
清 清 清  
邦 隆 琴

六、一中節石

同 同 同 淨瑠璃  
都 都 都 都  
一一一真規みいき  
ま

橋

上調子 同 同 三味線  
都 都 都  
一一一そ  
江の代中

七、清元座

同 同 淨瑠璃  
清 清 清  
元 元 元  
幸 志 小志  
美 寿 寿 太  
太 雄 太 夫  
夫 夫 夫

頭

上調子 同 三味線  
清 清 清  
元 元 元  
国 志 清  
太 寿 之  
郎 朗 輔

八、箏曲梅

唄

の

小横水高高  
林堀田橋橋  
栄清素正宗  
景雪清子清

功

三絃箏  
福藤唐鈴  
智田沢木  
万寿榮清  
鈴寿寿

第二部 番組（四時半開演）

一、箏曲楓の花

箏低音

尺八	田中胡童	丹元文勝	長羽文志	藤山文千佐	米谷文華
		山元文志	川羽生	川代千佐	子奈
		月中文勝	文千佐	文千佐	
		如童於	生於	生於	

箏高音

小永白妹	斎竹大	米川
川山鳥尾	藤下	貫川
文多緒	文千恵	文香文登
	文千恵	文香文志
	文千恵	文香文加
	文千恵	文香文壽

二、新内千日寺名残鐘（三勝）

三味線  
上調子  
新内  
勝次郎

淨瑠璃 花園 一声

三、義太夫 七段目一力茶屋の段

仮名手本忠臣蔵  
由良之助 竹本駒之助 土佐廣  
おかる 竹本朝重  
平右衛門 竹本朝重  
加珠子 みさ子 ちか子

三味線  
三味線  
鶴澤 三生

四、河東節 熊野

同 同 淨瑠璃  
山 山 山 彦  
彦 彦 彦 加珠子  
加珠子 みさ子 ちか子

上調子 同 三味線  
山 山 山 彦  
彦 彦 彦 みな子  
みな子 せい子 さわ子

五、箏曲恋 中田博之作曲

夫 碠

同 同 唱  
石安 中  
倉蒜 田  
松博 博  
京佳 之

尺三 同 同 箏  
八絃 中稻 高  
山久 村垣 野  
口松 口松 緑博 和  
五君 五君 博幸 保之  
郎博 郎博 幸保 之

六、清元御名残押繪交張（鳥羽繪）

淨瑠璃 清元 梅寿太夫  
清元 登志寿太夫  
元成美太夫

三味線 上調子 清元 梅寿吉  
常磐津 常磐津 一東幹五郎  
常磐津 一東幹五郎

七、常磐津 戒詣 恋釣針（釣女）

淨瑠璃 常磐津 文字太夫  
常磐津 小文字太夫  
常磐津 八重太夫

三味線 上調子 清元 梅寿吉  
常磐津 常磐津 一東幹五郎  
常磐津 一東幹五郎

八、長唄春興鏡獅子（鏡獅子）

同 同 同 唱  
岡杵杵岡  
安屋屋安  
喜代明郎  
喜代明郎  
喜代郎吉朗  
喜代郎吉朗  
喜代郎吉朗

囃子 同 同 同 三味線  
太鼓 大鼓 小笛 笛  
藤望 望堅福 杵柏柏稀杵  
舍月 月田原 屋 家屋  
呂太左意次 雪郎 喜三郎 喜三郎  
百之助 久助

## 歌詞と解説（演奏順）

（解説 竹内道敬）

### 第一 部

#### 一、長唄 元禄風花見踊（花見踊）

明治十一年六月、東京新富座の開場式の大目に余興として初演された。竹柴飄助作詞、三世杵屋正治郎作曲。全曲二上りの派手な曲で、上野の山の花盛りに集まる人々、湯女の勝山をはじめとして、丹前姿の武士、供奴、町人などが、すべて元禄風俗の派手な姿で物踊りになるという趣向です。花見を題材にした曲はたくさんありますが、この曲ほど派手で知られたものはありません。もつともよく元禄風をあらわした曲が、明治時代に作られたというところにおもしろ味があります。とくに「連れて来つれて」のところの三味線は、当時の長唄としてはまことに型破りな独創的なものですが、現代では花見とか元禄時代をあらわすときには、なくてはならないものとなっています。

明治時代に作られた長唄中の傑作の一つであり、外国にも

二上り「吾妻路を、都の春に志賀山の、花見小袖の縫宿も、派手をかまわぬ伊達染や、斧琴菊の判じ物、思い思ひの出立栄え。」  
「連れて、着つれて行く袖も、たんだ振れ振れ六尺袖の、しかも鹿の子の、岡崎女郎衆、裾に八つ橋染めても見たが、やんれ、ほんはにそつかいな、そさま紫色も濃い、やんれ、そんれはそうじやいな、手先揃えてざざんざの、音は浜松よんやさ。」  
「花と月とは、どれが都の眺めやら、かつぎ眼深に北嵯峨御室、二条通りの百尺屋が、しんきこらした真紅の紐を、袖へ通して、つなげや桜、ひんだ鹿の子の小袖幕、目にも綾ある小袖の主の、顔を見たなら、なおよかる、やんれ、そんれはえ。」  
「花見するとて熊谷笠よ、飲むも熊谷、武藏野でござれ、月に兔は和田酒盛の、黒い益闇でも嬉し、腰に飄簾、毛巾着、酔うて踊るがよいよい、よいよいよいやさ。」  
「武藏名物月のよい晩は、おかた鉢巻蝙蝠羽織、無反り角鶴角内連れて、ととは手細に伏編笠で、踊れ踊れや、布搗く杵も、小町踊の伊達道具、よいよいよいやさ、面白や。」  
「入り来る入り来る桜時、永當東畠人の山、いやが上野の花盛り、みな清水の新舞台、賑わしかりける次第なり。」

#### 碁太平記白石嘶

安永九年（一七八〇）正月、江戸外記座初演。紀上太郎、鳥亭焉馬、谷楊黛らの合作。十一段続ぎの時代世話物で、由比正雪の乱と宮城野信夫姉妹の仇討をからませた作品。

#### 一、義太夫 新吉原揚屋の段（宮城野信夫）

姉妹がめぐり逢う七段目新吉原揚屋の段では、信夫（作品中ではおのぶ。わかりやすく信夫とした）の奥州訛りが珍らしがられ、人気を博した。芝居でもこの場を独立させて上演されることが多く、俗に「宮城野信夫」として親しまれている。

百姓与茂作は怪しい鏡を見つけたことから代官の志賀台七に殺される。女房のおさよは長悪いだったが、これを知つて病が重くなり、やがて死んでしまう。一人残された娘のおふは、江戸吉原にいる姉を尋ねて旅に出る。大黒屋の亭主惣六は、かどわかされそうになった田舎娘を助けて連れて来る。今を盛りの宮城野の部屋では、新造たちがその娘の田舎訛りを面白がり、からかっているが、その訛りから、宮城野は妹のおのぶであることを知る。妹は父母の最後のありさまを、今日は時間の都合上、姉妹がめぐり合い、妹が父母の死の様子を物語るところ、姉が身を売った理由を話すところを演奏いたします。

信夫「いやさ、いやさいやさ、母の常にいわしやるには、姉さあの方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合い、委細心底打ち明けろといめした、それがあるなら早くつんだし、見せてくんされ姉さあ」と、へなつかしながら油断なき。  
宮城野「おお利巧な人、利巧な人、疑がやるももつとも」と、へ立つて簞笥の袋棚、襖明ければうやうやしく、浅草寺の觀世音、扉表具に押し並べ、飾りおいたる箇守り、見るに妹も疾し遅し、首にかけまく壺井の守り。  
宮城野「これこれこれ、この姉が國を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこの守り、父様は楠家のご浪人ゆえ、河内の国壺井八幡様のお守り、それをもつていやるからは、妹じや、妹じや、これいのう、これ、よう顔見せてたもいのう」  
信夫「おお、姉さあでござるかいのう、逢いたかった」と、へもろともに、嬉しなつかしがり寄り、ほかに詞もなくばかり。  
宮城野「おお妹、よう尋ねて來たもつたの、年端もいかぬそなだ、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でであろう、が、もし道中ではぐれでか」と、へ問われてわっと声をあげ、  
宮城野「ああこれ、これこれ、こう廻り逢うからは、悲しい事も何もな  
い、泣いてはすまぬ、さあどうぞ」と、へ尋ねる姉の心もぞぞろ。  
信夫「ええ、遠國隔つた姉さあ、それで何もきかないな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という惡侍に」  
宮城野「やあやあやあ、何といやる」  
信夫「さあ、ぶつ斬られてお死にやり申した」  
宮城野「とつともう悪い時、そしてどうじやその後は」  
信夫「さあおれだけもすんでの事、殺さるるところ、庄屋の伯父さあがかけつて来て、力んでみても肝心の、証拠がなければ父は大死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず、すごらすごら、そんだけの許嫁のご亭主にも対面はしたれども、これもこの江戸さあへ帰り申す、後はおれだけと母とばかり、頼りない身に下地の大病」

入相の、鐘さえ早く暮れ果てて、廓のうちは万燈会、歌舞の苦蘿の色揃え、わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、簾筒長持鏡台の、挨拶りまで綾錦、袱紗なりけるありさまなり。  
「見やる宮城野おのぶがそばもしやそれぞとすり寄つて、  
宮城野「さつきにから話をきけば、姉を尋ねる人そなだ、奥州はどこらの生れ、なんといふところじやえ」  
信夫「あいさあ、奥州は日坂近在、逆井村といふところ」  
宮城野「ふう、その逆井村といふところに、与茂作といふお人があつたがの」  
信夫「あいさ、その与茂作といふのは、めらしが父」  
宮城野「やあ、そんならわしが妹」と、へすがり寄るを突き退けて、

よく知られています。

宮城野「やあやあやあ、おわざらいでもあつたかいの、してこ本復なさつたか、さあどうじや、どうじや」

信夫「いえいえ、六月十六日に、悲しやついにお死にやり申した」

宮城野「やあ、すりやご養生も叶わんだが、はあ」

信夫「ええこれ、話さ聞いてさえ、それがいに歎かっしゃるは道理だけ

きに見とらえたおれだあけが心、ええこれ、泣かっしゃるは道理だけ

れど、頼りに思う姉さま、また病氣おこしては、なおかすまない、す

まないわいの」

宮城野「いやいや、いやいや、なかなかわざらうような事じやない、そ

うして、どうじやどうじや」

信夫「さあ、なじよにもかじよにも、おれだけ一人、庄屋の伯父さあが

引き取つて、奉公しろといめすけど、何の奉公どころかい、くやし

いと、くやしいで、あとさき思はず、檀那寺へ駆け込んで、坂東順札

するというて笈摺もらい、國元さあを突つ走つたも、そんに尋ね逢

うたら、姉妹心一致にし申して、父の敵が討ちたいばかり、道中す

がらの艱難も、そんだに逢つが楽しみに、がいに苦勞とは思わなんだ、

しかし逢つたらかっぱりと、よろづ骨が抜けたよな、抜けたよな、

これ、それがいに歎かっしゃる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てく

れた、めこやめらしというてくんさい、姉さま」と、

あやも泣き入る幼な氣に、長の旅路の憂き苦労、思いやるせも宮城野

に、続くは末の松山を、袖に波越す涙なり。歎きのうちも姉はなお、妹

が背を撫でおろし、

宮城野「おおそのように思やるももつとも、しかしそなたは父母に、長

う添やつた身の果報、これこの姉を見やいのう、年貢に迫つて父様は

水牢、その苦を助きようばかりに、これこの廓へ身を売つたを、思

い返せば十二の年、そなたは五つ子顔さえ見知らず、父様の御最後や、

母様の死に目にも逢わぬとい悲しい、不孝な、はかない事があらか

いの、こうした事とは露知らず、この妹はまめなか知らぬ、父様、母

様、おわづらいでもあろうなら、よもや知らしてたもろうもの、便り

のない杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ帰つてお二人に、染させ

まして、どうしてと、色ようは気をたしなんで、勤め大事と許嫁の殿

御の事も、そなたの事も、恋しなつかし思うのを、楽しみ暮した甲斐

身の上、ああ、味気なき浮世じゃなあ。

(中略)

「きびしけれ、（中略）へ浦里あとをうち眺め、涙にくれていたりしが、浦里へええ、お情あるお言葉なれど、これはかりはどうも忘られぬ、お許しなされて下さんせ、まだこの上にどのような、悲しい苦しい責め苦でも、私やいとやせぬどうなつても、思いきられぬ、いつそ添われぬものならば、一緒に死にたい時次郎さん、殺して下んせ、死にたいわいのう。三下りへ昨日の花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理という字は是非もなや、勤める身のままならず。

浦里へええ、この苦しみに引きかえて、あの二階の三昧線は、いつぞや主の居続けに、寝巻のまま引き寄せて、互いに語る楽しみの、今宵は引きかえ今頃は、どこにどうしていさんすやら、とにかく添われぬ二人が身の上、ああ、味気なき浮世じゃなあ。

浦里へおお、よういうてたもつた。そなたまでさえそのように、へ主を思つてたるもの、私が心を推量しや、何の因果でこのように、いとしいものかさりとては、傾城に誠なしとはわけ知らぬ、野暮の口から粹すぎの、粹の粹ほどはまりも強く、ただなつかしゆいとしさの、愚痴になるほど恋しいもの、たとえこの身は泡雪と、ともに消ゆるもいとわぬが、この世の名残りに今一度、逢いたい見たいとしやくりあげ、狂氣の如く心も乱れ、涙の雨に雪解けて、前後正体なかりけり。

（

のウレイガカリで、あと時次郎が助けに来て、廓を抜け出すまで。だが、今日は時間の都合でこのクドキまで。全体に色彩ゆたかな場面で展開する物語りで、新内節の代表曲といふざわしい。

#### 四、常磐津 宗

清（恩愛贖閨守）

むね

悲劇の武将、源義経を主人公にした作品は数多く作られ、邦樂・邦舞の世界には「判官もの」という分類がある。それらの中でもつとも義経が幼ないのがこの作品。

源義朝の没後、その愛人常磐御前が、今若、乙若、牛若の三人の子を連れて諸々をさまよい歩くうち、山城の国木幡の関に来かかる。折からの雪の中、関守の宗清にみとがめられ、子供たちを助けるために操を破り、清盛にしたがうことになるという、雪中問答の場面。

宗清が主人公で、ちょうど「勧進帳」の富樫のよな心持と、常磐御前に対する同情心、それにはのかな色気が必要とされるので、常磐津のなかでも難曲といわれている。

文政十一年（一八二八）十一月、江戸市村座で初演の「黄之雪源氏鳳凰」の二立目で初演された。奈河本助作詞。三世常磐津小文字太夫、五世岸沢式佐ほかの出演だった。なお舞踊会などでは、この場面は少し陰気だというので、「鞍馬山」をつけて、この場面を牛若丸の見た夢だったとするむきもある。

（兵書）治世に乱の忘れぬため、かの孫康が雪あかり、どりや友人を開い

もう、名乗り合うたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が、心も推してたもの」と、  
「手を取り交す姉妹が涙、涙を、立ち聞くも貴い泣きしてたてわけの、暖簾も濡るばかりなり。

#### 三、新内節 明鳥夢泡雪（雪責め）

初代鶴賀若狭掾直伝で、「蘭蝶」「伊太八」とともに新内節の代表曲とされる作品。

明和六年（一七六九）七月三日、伊之助三芳野の心中事件がおきた。男は浅草藏前に住む幕府の御用商人伊藤伊右衛門の養子で二十一歳、女は新吉原京町二丁目萬屋の遊女で二十四歳だった。二人は前の年から馴染みを重ね、おさだまりの金につまり、男は勘当、女は他の客を断る、というので借金はふえるばかり、結局二人は示し合せて廓を抜け出し、三河島田甫のあたりで心中した。

この事件をとり上げて脚色したのが初代鶴賀若狭掾で、ニュース性の強い淨瑠璃だったが、名曲なので今日まで語りつがれてきた。上下にわかれ、上は浦里部屋の場、下がこの雪責である。

黒堀、古木の松、そこに降る雪、そして赤い色の多い女の衣裳、と舞台も色彩あざやかな場面で、話が展開していく、

二階からきこえてくる唄は「昨日の花は今日の夢……」で、これはめりやす「いもせ川」の一部。「壇浦兜軍記」の阿古屋琴責めをうたつたもので、當時流行っていたものだろう。

余所事に使つて立体的な劇的効果をあげている。

禿みどりのあどけないセリフのあと「何の因果でこのよう

に」以下の浦里のクドキは、詞からクドキに入るときの約束

て見ようか。

「故郷を出でしにまさる涙かな、夢に別る枕とは、げに定家が詠み歌も、身に異竹の伏見なる、しるべの方を尋ねんと、紫竹を出でてあとや先、へ歩み習わぬ道芝の、雪の剣に裳裾さえ、紅さそう照草の、今はかなき常盤の前、痛わしや今若と、乙若君を両袖に、包めど余る憂き事の、世を牛若は懷に、凍る乳房を抱き寝の、顔を見るさえいとどなお、歩み疲れておわしける。

「母様危のうござります。必ず怪我して下さるなや。

「おお今若よういうてたもつた。紫竹の里を出でしより、たよりに思うはそなたばかり、思えは昨日は昔にて、鏡が石に影頼み、三人の子供は儲けても、御運つたなき源のこの行末、必ず平家の武士に、見咎められぬようにしてたもや、とこういううち伏見へも間もない。二人とも辛抱して歩いてたもや。へいえど乙若頃是なく、もう歩くのは、いやじやいやじや。これはまたどうしたもの、今にねんねをさすほどに、さきわけて歩くものじや、それ見や、向うが雪明かりで、鳥羽の繩手や、木幡の里。

へやがて木幡の山越えて、馬はあるどもかちはだし、君を思えは行くぞとよ、歩くものには花紅葉、花の手車手をひいて、へ歩みかかれは雪風に、笠をとられて突く杖の、雪に涙も玉錐の、その道もせを行き惱む。

へやあ、夜中といい怪しい女、幼な子を大勢連れ、この関を越す氣であらうが、ここは木幡の関。へ義朝が残党誣議のため、宗清殿のきびしい固め、さあ、ありようによ名乗つて通れ。へさあ、妾はもと都の市人、伏見のあたりへしるべつて、尋ねるうちにこの大雪、二人の子供に道はか行かず、思わず日暮らせたり。どうぞ情にこの関を、へやあ、そとう吐かすほど、なお怪しい。さあ女めと立ち上れば、へやれ待て兩人、聞けば子供を連れた女とな、源氏の余類に似合いの註文、身がじきじきに糺してくりよう。

へ何か思案の宗清が、水る足駄に善惡の、邪正の道を踏み分けて、関のとばその庭伝い、へ賤しからざる上萬の、供をも連れだ一人、見れば幼ない子供連れ、はてあでやかな、へきつと眺めていたりしが、へこりやこりや女よく聞けよ、今四海ようやく穏かなるも、先だつて滅びたる、左馬頭義朝、大勢の子供あつて、所々方々に漂泊なし、ことに五条

の雜仕常盤が腹には、三人の男子あるよし、生け置いては後日のため、見つけ次第に首打てと、新たに立てしこの閑所、この宗清が眼力に、一目見たればのがれはない。常盤なりと白状いたせ。

へ様子問われて塞がる胸、へほほ、そんなら三人の子供がある故に、さあその疑いも子供ゆえ、子のある女はいくにも、へああ、いわれなそのいいわけ、子供のことはさておいて、いわすと知れた芙蓉のまなざし、國色のきこえある常盤御前、外にあろうはずがない、身が引つ立てて福原殿へ。へすりや妾をどうあつても、ほんに思えはこの身のぬれぎぬ、是非もなき世の有様じやなあ。

へこりや者共、大事の落人、閑所の庭へ。へさあ女め、立とう。へ是非なくともあらしこに、引つ立てられて常盤御前、へ隙間もあらば遠近の、たつきも知らぬ闇の庭、巢をはなれたる鶯の、へ吹雪に迷う風情なり。

へもうこうなつては籠の鳥、逃ぐるて逃しはせぬ。しかし一人ならず三四人、思えはふびんな事でもあり、おお幸いさいわい。へうしろに立ち高札の、雪打ち払い文字のあや。へこれは見よ、この高札に松を手折つて松を助く、へ操にかけしことばづめ、返事を松の高札に、手折るともまた助くるとも、へこの宗清へ仰せなれど、へ生けてはおけぬ落人の、へ素性を明かして助かるか、いやさもし常盤なら手にかける、また松ならば助けるとも、思案きわめて返答いたせ。へさあそれは、へさあさあさあ。

へなるほど妾こそその常盤、とても叶わぬこの身の行末、さあいさぎよう手にかけて。へおおよい覚悟、観念なせ。

へ抜き放したる水の刃、峯の吹雪に照りさそ、光は夜半の月代と、見紛ううちにこわいかに、刃物はそれで谷影の、岩の間に雪散つたり。へやや、そりや自らを助けんと、へ松を助くる制札の、捷きびしき清盛殿、松の操を破れとい、謎がとければその松の、雪もとけよと君の戦命。へすりやその松に松の操を、へ色かえぬ松、色かえる松、へして三人のこの子供は、へ小枝とともに、へ雪を払つて、へすぐさまこれより、ささ参ろう。へいざ御供と宗清に、助けられたる幼な子の、その源は谷の音、峰のこだまとおとづれて、南柯の夢と覚めにける。

## 五、筝曲新早さらし

富山清琴作曲

北沢勾当作詞、原曲（古さらし）は同じく北沢勾当作曲。  
その後、ふつうにいう「さらし」が深草検校の改曲で行われ、それがさらに編曲されて「早さらし」として京都に伝承された。それにもとづいて、現富山清琴師が数年も工夫して新らしく手をつけたのが、この「新早さらし」である。

助演者はふつうの「さらし」の手を演奏し（この場合「地」という）、合の手の一部や手事では、いわゆる同じ音型のくり返しの地を担当する。歌の部分でも清琴師が技巧的な変奏をきかせるのが特色であるが、とくに手事の部分でもっとも技巧を發揮する。

へ横の島には、さらす麻布、賤が仕業や、宇治川の、波か雪かと、白妙に、いざ立ち出でて、工布さらぞ。（合）

（合）へかさきの、渡せる橋の、霜よりも、さらせる布に、白みあり候。

（合）へノウノウ、山が見え候、朝日山に、霞たなびく、景色は、たとえ駿河の、富士はものかは、富士はものかは。（合）

（合）へ小島が崎に、寄る波の、小島が崎に、寄る波の、月の光を、うつさばや、月の光を、うつさばや。（合）

（手事）へ見渡せば、見渡せば、伏見・竹田に、淀・鳥羽も、いづれ劣らぬ、名所かな、いづれ劣らぬ、名所かな（合）

（合）へ立つ波は、立つ波は、瀬々の網代に、障えられて、流れる水を、堰き止めよ、流れる水を、堰き止めよ。

（手事）へ所からとてナ、所からとてナ、布を手毎に、横の里人、うち連れて、戻るやし、賤が家へ。

（このは大江の定基といわれし、寂昭法師にて候。われ入唐渡天し、仏跡を巡り、清涼山に到りて候。へこれこそ聞きつる石橋なれ、なおもくわしく問わんとて、しばしかたえに休らいぬ。へ松風の、花を薪に吹き添えて、雪をも運ぶ山路かな。へ樵の歌や牧の笛、へ人間万事色々の、世渡るさまざま面白き。海山遠く越え来ぬる、へ故郷の空を見返れば、へ雲また跡を立ち隔て、へ数も限りも白波の、ひびき合うさえ雨とのみ、へ誰れ松風の音もなし。

（この曲は、明治二十六年に発表されたもので、初世都一広の作曲。能の「石橋」から脚色された作品で、一中節らしい特色が十分に發揮されています。

## 六、一中節石橋

きょう

らずして、下は泥翠も白雲の、虚空を渡る如くなり。かえすがえすも危うさよ。

「一応はことわりなれど、またよく思い巡らすに、それ國土世界には、橋の名所さまざまに、万民豊かに世を渡る、すなわち橋の功德とかや。

「いやこの橋は、人間の、渡せるものにあらずして、おのれと続ける橋なれば、石橋とは名付けたり。その景色こそ夕陽の、雨の晴れたる後の虹、弓をば引ける形なり。」  
「神變不思議の仏力ならで、へいかでか橋を渡るべき。  
二上りへされば文殊の淨土には、常に聞こゆる音楽に、花降りかかり獅子王の、勇みなしてぞ舞い遊ぶ。  
「神仏加護の人ならば、獅子の舞樂もおだやかに、必ず迎え申すべし。  
「へしばらく待たせ候えや。  
「へに向の時、今いくほどによも過ぎじ。  
獅子の座にこそ直りけれ。

本調子「獅子団乱旋の舞樂の砌、獅子団乱旋の舞樂の砌、牡丹の英、匂い満ち満ち、大筋りきんの獅子頭、打てや雛せや牡丹芳、黄金の蕊あらわれ、花に戯れ枝に臥し、げにも上なき獅子王の勢い、廢かぬ草木もなき時なれや。  
「万歳千秋と舞い納め、万歳千秋と舞い納めて、  
獅子の座にこそ直りけれ。

## 七、清元座

## 大津絵

## 頭

藤井源八作詞、初世清元斎兵衛作曲。文政九年（一八二六）九月江戸中村座初演。関三十郎の「歌へすぐ（名残大津絵）五変化舞踊の一。初演のときは長唄と掛け合ったが、今は清元だけである。「大津絵の座頭」のほか、唄い出しをとつて「ひよつくりの座頭」、初演者の名から「関三の座頭」ともいわれている。

## 八、箏曲梅の功

## 御礼邦楽連合会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。  
した。何かと不行届の点もありますでしようが、お許しを願いまして、どうぞゆつくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でござります。これからもどうぞ続けて邦楽に変らぬ御支援をいただけますようにお願い申し上げます。

来年も三月六日（日）に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がきまりました御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日お書き下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願ひを申し上げます。

ありがとうございました。

歌舞伎舞踊の座頭物の一。盲人の生活や風俗、動作などを主題とするのは、能狂言以来の伝統があり、これらの座頭は盲人の官職名ではなく、一般名称としてあつかっている場合が多い。座頭物は、表象として杖を持ち、音曲も多く伴うのが特色としてあげられる。

「ひよつくり／＼」と犬に追われて出た盲人が、履物をとられたり、犬を相手におかし味を見せるというもので、「梅に驚……」のしゃれた唄、花に置く霜……の伊勢音頭、「目に見えねど……」など、唄いどころ、きかせどころの多い曲。内容的に……など、あまり意味がなく、当時の流行唄を中心とした世相のようないものが感じられる。

前弾「ひよつくり／＼ひよつくりひよつと、罷り出でたる、やつがれは。色にも酒にも、目無し鳥。どっこいそは虎の皮。まわしのはしは取られても、恋の手取の、やさ法師へ中々その手じやまいるまい。わるじやれな「梅に驚」に朝顔。按摩針。まんざら退いた中じやない「一番相撲でまいるべい」引捨て負い投げ、内無双、獅子のほら入り。ほら返り。へええ、畜生奴と負け腹で、追えど叩けど。へくる／＼くるくるとああほつとしたええままよへまるる音頭の一節は首頭へ花に置く霜小籠のあられ、こぼれやすさよ。我が涙。よいやさよんやなへええ、又しでもしつつこい。杖振上げて打たんとせしが。いや／＼これでは行かぬと気をえて、こい／＼マこれ、わんじやいなそのようにへわしをじらすが楽しみか、主の毛色のよし悪しは「目には見えねど初雪や、その足跡の。梅が香のへ洩れて幕うも。遠吠えの声で聞き知る私じやものを、あんまりむごいと寄り添えば「ざれて添い寝の仇枕ぞめきも通う紙ぎぬたへ嫁ふる、嫁下女をふる、下女はなあえつるべの繩をふる、すいとこきやいつかな構う事はねえへわしが願いが叶うならば、今の浮世に一人寝せすに寝もせまい、すいとこきやいつかな構う事はねえへせまい浮世じや、ないかいな「我等も浮かれ座頭の坊、おや／＼また悪洒落めが杖と笛へ盲探しの身は四つ這い、後を慕うて、走り行く。」

## 一、新内節 千日寺名残の鐘（三勝半七）

せんにちでらなごりかな（三勝半七）

## 一、筝曲楓の花

かえぞ  
はな

松阪春栄（一八五四—一九二〇）は、吉沢検校の古今組の手事の補作者として知られるが、保守的な京都にあって一人

明治新曲の作曲活動を行ない、この「楓の花」のほか「墨絵の芦」「春の栄」などを作曲している。

この曲は明治三十年頃の作曲といわれ、作詞は尾崎夫夫。京都の嵐山の初夏をうたつたもの。構成は、前奏—前唄—手事（マクラ）—本手事—チラシ—後唄—後奏という手事物形式で高低重奏もの。とくに長い手事部分の器楽性を楽しむことができる曲である。

（花の名残もあらし山、梢こすえの浅みどり、松吹く風にはらはらと、散るは楓の花ならん、いせきを登る若鮎の、さばしる水のみごもりに、なくや河鹿の声澄める、大堰の岸ぞなつかしき。）

（手事）  
（川上遠くほととぎす、しのぶ初音にあこがれて、舟さしのぼし見に行かん、戸無瀬の奥の岩つつじ。）

元禄八年（一六九五）二月七日、大阪千日の墓所南側石垣下の畠で、棲結び心中があつた。男は奈良五条新町の赤根屋半七三十四歳、女は大阪長町美濃屋の湯女三勝二十四歳だつた。この二人が樓を結び合せ、刃をもつて相果てた心中は非常な評判となり、すぐに大阪の岩井半四郎座で脚色上演された。別に歌祭文や音頭にもうたわれ、紀海音は「笠屋三勝二十五年忌」を書いたし、延享四年（一七四六）には「女舞劍紅楓」が上演された。

その「女舞劍紅楓」の第五段目を脚色したのがこの新内曲で、初代鶴賀若狭掾の直伝曲。しかし、その前に若狭掾の師である富士松薩摩掾にも同名の作品があるので、基本の形は早くにできていたものだろう。

新内ではその複雑な筋をとり払い、半七と三勝に関するところだけを抜きとつて脚色してあり、人物も背景もわかりやすくなつていて、そこそこに、半七と別れてくれという頼み。意地悪でなく、ほんとうは善人である母親の性格はまだ明らかでない。しかし三勝には別れる気持はさらさらない。せつかくの対面で、すぐに別れろという半七の母に向かって「一夜流れの仇夢も……」とかきくどくところはけだし絶唱で、きかせどころ。そのあとどうなるのか、時間があればじっくりと続きをきかせてもらいたいところである。

三勝へいえ、いえ、そりやならぬ、わしやいやじや。一夜流れの仇夢も、別れは惜しき人心、まして馴れそめもう五年、子までなしたる半七さん、炎の中に暮そうが、あなたをのいて片時も、浮世の日影が見らりようか、むごい、つれない、胴欲な、別れという字は聞いてさえ、胸にしみじみ悲しいと、恨み涙にくれいたる。

## 三、義太夫 七段目一力茶屋の段

寛延元年（一七四八）八月十四日初日で、大阪道頓堀竹本座で初演。その後間もなく歌舞伎にも移され、日本を代表する戯曲として、上演回数ももとも多い作品。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳（宗輔）。全十一段。今さら説明するまでもない名作であるが、この七段目のあらすじだけを記しておこう。

祇園一力茶屋の場、酒と女で放蕩の限りをつくしていくように見せかけている由良之助。その真意を探ろうと、九太夫と伴内が尋ねて来て酒宴になる。主君の速夜になまぐさ物を食べさせようとすると、由良之助は平然とこれを食べ、酔いつぶれてしまう。またその帯刀も鏽びていて、二人は安心する。

そのあと由良之助が、顔世御前からきた密書を読んでいると、離れの中二階から軽に説まってしまう。由良之助はお軽を殺すために、身請けすることになる。そこへお軽の兄で足軽の平右衛門がやってきてお軽に逢い、由良之助の近況をきく。またお軽は父や夫の勘平の死を知る。平右衛門はお軽を殺し、それを功に連判の列に加わろうとする。その忠誠を

知った由良之助はお軽を助け、九太夫を刺し、平右衛門を味方に加えることにする。

今日は時間の都合で後半の部分を演奏いたします。

「折に二階へ、勘平が妻のお軽は酔いざまし、はや廓なれて吹く風に、うさをはらしているところへ、

由良之助「ちよと行くぞや、由良之助ともあろう侍が、大事の刀を忘れておいた、つい取つてくるその間に、掛物もかけ直し、炉の炭もついでおきや、ああそれそれ、こちらの三味線踏み折るまいぞ、これ

はしたり、九太はもう去なれたそな」

「あたり見廻し由良之助、釣燈籠の明りを照らし、読む長文は御台より、敵の様子こまごまと、女の文の後や先、まいらせ候ではかどらず。へよ

その恋よどうらやましく、お軽は上より見下せども、夜目遠目なら字性もおぼろ、思い付いたるべ鏡、出して写して読みとる文章。へ下家よ

りは九太夫が、繰り下す文月影に、すかし読むとは神ならず、へほどけかかりしお軽がかんざし、ぱたり落つれば、へ下にははつと見上げて

後へ隠す文、へ縁の下にはなおえつば、へ上には鏡の影隠し、

お軽「由良さんか」

由良之助「お軽か、そもそもはそこに何してぞ」

お軽「私やお前にもりつぶされ、あんまり辛さの酔いざまし、風に吹かれているわいな」

由良之助「侍冥利、三日なりとも聞うたら、それから勝手次第」

お軽「はああ嬉しうござんす」と言わしておいて笑おうでの」

由良之助「いやすぐに亭主に金渡し、今の間に拝さそ、気遣いせずと待つていや」

お軽「そんなら必ず待つておるぞえ」

由良之助「いやいや、段梯子へ下りたならば、仲居が見付けて酒にしよう、ああどうしような、ああこれこれ、幸いここに九つ梯子、これをふまえて下りてたも」

「と小屋根にかければ、

お軽「話したいとは、頼みたい事かえ」

由良之助「まあそんなもの」

お軽「まわって来やんしよ」

由良之助「いやいや、段梯子へ下りたならば、仲居が見付けて酒にしよう、ああどうしような、ああこれこれ、幸いここに九つ梯子、これをふまえて下りてたも」

由良之助「それもたつた三日」

由良之助「それ合点」

お軽「忝うござんす」

由良之助「どれ金渡して来るぞ」

平右衛門「ア騒ぐは、さすがは花の祇園町、てもまあ面白そうに唄い

おるな、入相の鐘は廓の夜明かなとはよくいったものだ、あははははは、この間に妹軽に逢いたいもんだが、ああ幸いの女中、いやこれ女中、この辺に山崎から、軽と言う女が勤め奉公に来ているはず、知つていたら教えてくれる、これ女中「ヤア妹でないか」

お軽「マア兄様か、恥かしい所で逢いました」

「と顔を隠せば、

平右衛門「苦しいない、苦しいない。関東より戻りがけ母人に逢つてくわしく聞いた。夫のためお主のためよく売られた、でかしたでかした」

お軽「そう思つて下さんりや、わしや嬉しい、したがまあ喜んで下さんせ、思いかけのう今宵請け出されるはず」

平右衛門「それは重置、なにびとのお世話で」

お軽「お前も御存知の大星由良之助様のお世話で」

「なんのいな、この中より二三度酒の相手、夫があらば添わしてやろ、暇が欲しくば暇やろと、結構すぎた身請け」

平右衛門「なんじや由良之助殿に請け出される、それは下地からの馴染みか」

お軽「いえ知らずじやぞえ、親夫の恥なれば、明かしてなんのいいまし

お軽「この梯子は勝手が違うて、おおこわ、どうやらこれは危いもの」

由良之助「大事ない、大事ない。危いこわいは昔の事、三間づつまたげても、赤薔薇も要らぬ年ばい」

お軽「阿呆いわんすな、船に乗つたようでこわいわいな」

由良之助「道理で舟玉様が見える」

お軽「おお、のぞかんすないな」

由良之助「洞庭の秋の月様拝み奉るじや」

お軽「いやもうそんなら下りやせぬぞえ」

由良之助「下りざ下ろしてやろう」

お軽「あれまた悪い事を」

由良之助「やかましい。生娘かなんぞのよう、逆縁ながら」

「へと後よりじつと抱きしめ、抱きおろし、

由良之助「なんとそもじは御覧じたか」

お軽「あい、いいえ」

由良之助「見たであろう、見たであろう」

お軽「あい何じややら面白そうな文」

由良之助「あの、上から皆読んだか」

お軽「おおくど」

由良之助「ああ身の上の大事とこそはなりにけり」

お軽「なんの事じやぞいな」

由良之助「なんの事とはお軽、古いが惚れた、女房になつてたもんねか」

お軽「おかんせ。嘘じや」

由良之助「さ、嘘から出た実でなければ根がとけぬ。おうと言や、おうと言や」

由良之助「いや言うまい」

由良之助「なぜ」

お軽「お前のは嘘から出た嘘じや」

由良之助「お軽、請け出そ」

お軽「エエ」

由良之助「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けしよ」

お軽「もう、いやわたしには」

平右衛門「あのその文残らず読んだ後で」

お軽「あいな」

平右衛門「むうすりや本心放擱者、お主の仇を報する所存はないに極わよ」

お軽「残らず読んだその後で、互いに見合わす顔と顔、それからじやらつき出してつい身請けの相談」

「聴けば、

平右衛門「むうそれで聞こえた、妹、とてものがれぬ命、身どもにくれ

「へと抜打ちにはつしと切れば、ちやつと飛び退き、

お軽「これ兄様、わしにはなに誤り、勘平という夫もあり、きっと両親あるからは、こんな様のままになるまい、請け出されて親夫に逢おうと思うがわしや楽しみ、どんな事でも謝ろう。赦して下んせ赦して」

「へと手を合わすれば、平右衛門、抜身を捨て、

平右衛門「可愛いいや妹、わりやなんにも知らぬな、親与市兵衛殿は六月二十九日の夜、人に切られてお果てなされた」

お軽「やあそれはまあ」

「お軽「やあやあやあそれはまあほんかいの。これのうのう」

平右衛門「道理だ」

お軽「どうしよう」

平右衛門「もつともだ」

お軽「どうしよう、どうしよう、どうしようぞいな」

平右衛門「おお道理だ道理だ。様子話せば長い事、おいたわしいは母者人、いい出しては泣き、娘軽に聞かしたら泣き死にするであろう、必ずいうてくれるなどの頼み、いうまいと思えども、とても遁れぬそちが命、その沢は、忠義一途にこりかたまつた由良之助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし、元来色にはなおふけられず、見られた状が一大事、請け出し、さし殺す思案の底と確かに見えた。よしそうのうても壁に耳、外より洩れてもそちが科、密書をのぞき見たるが誤り、殺さにやならぬ、人手にかけ、大事を知つたる女、妹とて赦されずと、それを功に連判の数に入つてお供に立たん、小身者の悲しさは、人にすぐれた心底を見せねば数に入れられぬ、聞き分けて命をくれ、死んでくれ、妹」

「と事を分けたる兄の言葉。お軽は始終せきあげ、お軽「便りのない身の代を役に立てての旅立ちか、暇乞いにも見えそなもとの、恨んではばかりおりました、もつたないが父様は、非業の死でもお年の上、勘平殿は三十になるやならず死ぬるのは、さぞ悲しかろ、口惜しかろ、逢いたかつたであろうのに、なぜ逢わせては下さんせぬ、親夫の精進さえ知らぬが私が身の因果、何の生きておりましたその後で、首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらばでござる兄様」

「といいつつ刀取り上ぐる、由良之助「やれ待てしばし」

「とどむる人は由良之助、はつと驚く平右衛門、お軽は、お軽「放して殺して」

「とあせるを押さえて、由良之助「ほう妹とも見上げた、疑い晴れた、兄は東の供を救す。そ

れ平右衛門「いかがはからいましよう」

由良之助「水難炊をくらわせい」

平右衛門「はあ」

由良之助「行け」

#### 四、河東節 熊野

や

九世十寸見河東（可慶）と五世山彦河良作曲。歌詞は山田

流箏曲から借りたものだが、作曲年代ははつきりしない。多分、嘉永二年（一八四九）のことであつたらしい。歌詞を借りたのは、この頃河東節と山田流箏曲とは関係が深く、河東節の曲をいくつか山田流箏曲にとり入れているので、その返札もあつたと思われる。

原拠は能の「熊野」。平宗盛の愛妾熊野御前は、故郷の遠江から來た病母の手紙を宗盛に示し、今のうちに一目なりとも逢いたいと暇を乞うが許されない。かえつて心弱さをたしなめられ、花見の供に同車させられてしまふ。東山のかなたを仰いで母を案ざる熊野の心をよそに、無情の車はほどなく清水に到着する。彼女はまず觀音に念誦して母の命を祈る。やがて桜の下で酒宴がはじまり、熊野は宗盛にすすめられて舞つたが、舞いのなかばに村雨が降つて来て花を散らしてしまふ。彼女はその心を「いかにせん都の花も惜しけど、馴れし東の花や散るらん」という一首の歌に詠み、宗盛に見せた。さすがの宗盛も、あわれと感じて暇を与える。熊野は喜びつつそのまま東をさして帰るのであつた。

河東節としては全体に節付けが細かく、雰囲気描写に細心の注意が行き届いている。

二上りへ清水寺の鐘の声、へ祇園精舎をあらわし、諸行無常の声やらん。地主権現の花の色、娑羅双樹のことわりなり、生者必滅の世のならい、げにためしある粧い。

三下りへ仏も元は捨て世の、本調子へ半ばは雲に上見えぬ、鶯のお山の名を残す、寺は桂の橋柱。へ立ち出でて峰の雲、花やあらぬ初桜の、

祇園林下河原、南を遙かに眺むれば、大悲擁護の薄霞、熊野権現の移ります、御名も同じ今熊野、へ稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、また花の春は清水の、ただ頼め、頼もし、春も千々の花盛り。  
へ山の名の、音羽嵐の花の雪、深き情を人や知る。  
へ妻御酌に參り候へし。へいかに熊野、ひとさし舞い候え。へ深き情を人や知る。へのうのう、にわかに村雨のして、花を散らし候はいかに。へげにただ今の村雨に、花の散り候よう。  
へあら心なの村雨やな。  
へ春雨の降るは涙か、降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ人やある。へよど、へ駒れし東の花や散るらん。  
へげに道理なり、あわれなり、はやはや眼とらするぞ、東に下り候え。  
へなにお暇と候や、へなかなかの事、とくとく下り給うべし。へあら嬉しさや尊やな、へこれ觀音の御利生なり、これまでなりや嬉しやな、これまでなりや嬉しやな。  
へかくて都にお供せば、またもや御意の変るべき、ただこのままにお暇と、夕告げの鳥が鳴く、東路さして行く道の、やがて休らう逢坂の、閑れば越路、へわれはまた、東に帰る名残りかな、へ東に帰る名残りかな。

年度の芸術祭ラジオ部門音楽の部の優秀賞を受賞した作品。これは、「砧」の器楽的表現を目的とした曲ではなく、能の四番目物の世阿弥作の「砧」を山田流箏曲化したものである。能の原曲は、都に訴訟のことで行つたまま、三年も帰つてこない夫を恋い慕つて、残された妻が、中國の蘇武の夫人の故事にならって、恋心と恨み心とをこめて、砧を打つが、やがてはかなくなつてしまい、そのため、死後に邪淫の責めをこうむる。しかし、最後は法華経の功德で成仏するといつた内容で、名曲として知られている。

この曲では、その前後の、砧を打つところから中入までを中心アレンジし、謡曲物の山田流箏曲としての伝統をふまえて作曲したもの。

手事部には、砧を暗示する旋律が現われるが、そのほか、秋風、虫の音、嵐、涙などの表意的な器楽処理も、それほど多くもなく、しかも原詞のもつ文芸性を、わかりやすく音楽化している。

#### 五、筝曲恋夫 砧

中田博之作曲

つま

こい

きぬた

〔前弾〕  
へ衣に落つる松の声、夜風を風や知らずらん、音づれの稀なる中の秋風に、憂きを知らする夕べかな。  
へ面白の折からや、へ頃しも秋の夕つ方、へ牡鹿の声も心淒く、見ぬ山風を送り来て、梢はいづれひと葉散る、空すさまじき月影の、軒の忍にうつろいて、へ露の玉垂れかかる身の、へ思いを述ぶる夜すがらかな。  
(合) へ宮漏高く立つて、風北に巡り隣砧緩く急にして、月西に流る。  
へ蘇武が旅宿は北の国、へこれは東の空なれば、へ西より来る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣打とうよ。  
へ古里の軒端の松も心せよ、己が枝々に、嵐の音を残すなよ、へ今砧の声添えて、君がそなたに吹けや風。へかの七夕の契りには、ひと夜ばかりの狩衣、へ天の川波立ち隔て、逢う瀬櫂なき浮舟の、楫の葉疏き露涙、へふたつの袖や萎るらん。

（文月七日の曉や、八月九月げに正に長き夜、千声万声の、憂きを人に知らせばや、月に色風の氣色影に置く霜までも、心凄き折節に。）

（手事）  
（砧の音、夜風、悲しみの声、虫の音交りて、落つる露涙、ほろほろはらはらとへいづれ砧の音やらん。恨めしや、せめては年の暮をこそ偽りながら待ちつるに、声も枯野の虫の音の乱る草の花心、風狂じたるこちして、病の床に伏し沈み、終に空くなりにけり。）

## 六、清元御名残押絵交張（鳥羽絵）

文政二年（一八一九）九月、三世中村歌右衛門が出した九変化舞踊の一つとして初演。二世桜田治助作詞、清沢万吉作曲。

鳥羽僧上の描いた漫画のうち、はだかの下男が鼠を追つかける。摺古木には羽根が生えて飛んで行くといふのを舞踊化したもの。  
はじめ軽快に、そして引く物尽しから早間な洒落た文句が続き、「へなせそのように」から鼠のクドキ。しかしこれはむしろ下女のクドキと取れぬこともない。あと投節があつて賑やかに終る。清元らしい粹な感覚にあふれており、文化文政時代の洒落た気分は、ちょっと他には見られない。踊りでも時々出るが、これは演奏できく方が楽しいようと思う。

（河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。明治十六年十二月に発表されました。のち明治三十四年「戒詣恋釣針（えびすもつでこいのつりぱり）」という題で舞踊劇として上演されたから、とくに知られ、流行するようになりました。  
狂言の「釣針」の趣向をそのままかりたもので、おおらかさと滑稽さの対比が見事にあらわされております。太郎冠者が醜女を釣り上げるところが、とくに面白くなっています。

（そもそもこれは猿樂の、昔よりしてその枝の、おかしい狂言師名に大藏や鷺流の、姿をつす釣女。大名へかように候者は、この所の大名でござる。ヤイヤイ太郎冠者あるか。太郎へハア、おん前に。大名へいたか。太郎へハア。大名へ汝も知る如く、この年まで定まる妻がない。うけたまわれば、西の宮の恵比須三郎殿は、福者と申すこと、が醜女を釣り上げるところが、とくに面白くなっています。）

## 七、常磐津戒詣恋釣針（釣女）

（この宮はまだか。太郎へもはやこの森の中でござりまする。大名へさらば参詣をいたそうず／＼。太郎へハア。大名へまづ鰐口にとりつこう。じやがん／＼。いかに木比須三郎殿へ申し候。われも定まる妻はなし。似合相應美しき、妻をお授け／＼と、三拜九拜したりける。大名へヤイ太郎冠者、今宵は通夜をしよう。汝もまどろめ。太郎へ畏つてござる。大名へあら尊や／＼。いかに木比須三郎殿へ申し候。勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取り上げて、大名へや、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある、これは何であろうぞ。太郎へ不思議なお告げでござりますな。大名へヤイこれは悟つた。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れといふことであろう。まず急いで釣りましよう。エイ／＼。釣るよ／＼、神の教えの釣針を、おろし、帰れ、とお告げが。太郎へこれは如何な事、私がお告げもその通り。大名へ急いで参ろう参ろう。勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取り上げて、大名へや、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある、これは何であろうぞ。太郎へ不思議なお告げでござりますな。大名へヤイこれは悟つた。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れといふことであろう。まず急いで釣りましよう。エイ／＼。釣るよ／＼、神の教えの釣針を、おろし、みめよき妻を釣ろうよ。合へ針をおろせば、不思議やな、気高き女を釣りあげて、大名へアラありがたや、さてもよい妻がかかつてござる。嬉しや／＼。太郎へ何がさてお喜びでござる。大名へこれ／＼、そなたは定まる妻じやによつて、目をかけてやる程に、夫を大事にしましょぞ。ヤ小野の小町か楊貴妃か、アラ美しい／＼。太郎へイヤ申し／＼、道々こつそり楽しもうと、背中へ入れてきたこの吸筒、お二人様の三々度、これにてめでとう御祝言。大名へや、これは一段の事じや。サアサア注げつけ。太郎へ心得てござる。大名へまづ女子の方よりさしませい。女へ申しわが夫、必ず見捨てて下さるな。大名へなんの見すててよいものか。女へオオ嬉し。大名へ太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ。太郎へ畏つて候。高砂や、この盃が二世の縁、神の御前で祝言は、三郎さまがお仲人、よしそれとても浮氣心があるなら、ほんに罰が当る）

であるぞいな。必ず見捨てて下さるな。やいの／＼と寄り添えば、へかたえに聞きいる太郎冠者、気をもみあせり。太郎へや申し／＼、その釣竿をお貸し下され、見事釣つて見せましよう。大名へ早う釣れ／＼。

太郎へいや釣る段ではござらぬ。エイ／＼。へ釣ろよ／＼、釣るものは何々。鯛に鰐に恵方棚に撞き鐘、信田の森の、狐にあらぬ釣針を、さげておろして三十二相、揃うた十七八を、釣ろうよ／＼、おかつさんを釣ろうよ。へ余念もながき鼻の下、オオ当るぞ／＼。どつこいしめたと引き上ぐれば、かつぎ目深にかつぎし女。アラ尊や、かかつたわ／＼、サアアこちらへござれ、嬉しや／＼。へサアアこれからは二々九度の盃じや。これへござれ。何も恥かしい事はない。そなたと夫婦になるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちん／＼鴨、天にあらば比翼の鳥、地にまたあらば連理の枝、必ずそもそもは變るまいな。悪女へ何の變つてよいものかいな。太郎へまず何はともあれ御面相を。へかつぎをとればこはいかに、河豚に等しき醜女ゆえ、太郎へやア、和御寮は鬼か、ばけものか。のう消えてなくなれ／＼。悪女へのうのうわが夫、今おつしやつた樂しみは、嬉しやうで／＼、わたしは忘れはせぬわいなア。太郎へやレ情ない、ゆるしてくれ／＼。悪女へそりやつれないぞえ、太郎冠者どの。へコレこちを向かんせ。エエ何じやいなア。

へ思えば深い恋の渕、沈むわが身を釣糸に、へ結んだ縁の西の宮、ひる子諸けて二世三世、へ変らぬ色は棹竹の、末葉榮ゆる女夫仲、離ればせじと取りする。大名へめでたいな。太郎へおめでとうござります。

へ笑い興ぜし能舞台、鏡の松の常磐津に、昔にかかる岸沢の、波の鼓のうちよりて、睦まじかりける次第なり。

## 八、長唄 春興鏡獅子（鏡獅子）

しゃんきょうかがみヒ

明治二十六年三月、東京歌舞伎座初演。福地櫻痴作詞、三世杵屋正次郎作曲。作詞は「枕獅子」をもととし、廓趣味を排除し、千代田城の大奥の女小姓に役柄をおきかえ、明治時代の高尚趣味にあわせた。「新歌舞伎十八番」の一。

前半は、大奥の鏡曳きの日に、余興に小姓弥生が踊り、踊るうちに獅子の精が乗り移って、獅子にひかれて入るまで。後半は石橋の獅子の狂いに蝶がからむというもの。

九代目市川団十郎が、娘の稽古している「枕獅子」を見て、その振りの面白さに目をつけ、ぜひとも舞台にのせたいと思つたが、傾城姿ではおもしろくないので、桜痴居士に依頼して大奥の女小姓が踊るよう改作したものといわれている。前半の華やかさと色氣、後半の勇猛さと獅子の狂いが対照的である。

今日の演奏会の最後にふさわしい、長唄の代表曲。

世の恋草をよそに見て、私は下崩え汲む春風に、花の東の宮仕え、忍ぶたよりも長廊下、へされば結ぶのそのかみや、天の浮橋渡り初め、女神男神の二柱、へ恋の根籠の伊勢海士小舟、川崎音頭口々に、本調子へ人の心の花の露、濡れにぞ濡れし髪水の、はたち鬱の固意地も、道理御殿の勤めじやと、人にうたわれ結い立ての、櫛の歯にまでかけられし、平元結の高髻も、かゆいところへ平打の、届かぬ人につながれて、へ人の関の別れ坂。

三下りへ春は花見に、心移りて山里の、谷の川音雨とのみ、きこえて松の風、げにあやまつて半日の客たりしも、今身の上に白雲の、その折過ぎて花も散り、青葉茂るや夏木立、飛彈の踊りは面白や。

へ早乙女がござれば、苗代水や五月雨、初の人にも馴染むはお茶よ、ほんにさ、へ恨みかこつもな、実からしんど、気にあたろうとは夢々知らなんだ、見るたびたびや聞くたびに、憎てらしいほど可愛ゆさの、へ朧月夜やほととぎす。

へ時しも今は牡丹の花の、咲くや乱れて、散るは、散るは。へ散り来るは、散り来るは、散り来るは、ちりちりちり散りかかるようで、面白うて寝られぬ、花見てあかそ、花見てあかそ、花には憂きをうち忘れ。打合せ合方へ咲き乱れたる風に香のある花の波、来つれて、顔は紅白薄紅さいて、見するは、見するは、ちょうど廿日草。へ牡丹に戯れ獅子の曲げに石橋のあります、

三下りへその面わざかにして、苔滑らかに谷深く、下は泥犁も白波の、音は嵐に響き合い、笙歌の花降り、簫笛琴箜篌、夕日の雲に聞こゆべき、目前の奇特あらたなり。楽合方  
犬薩摩へそれ清涼山の石橋は、人の渡せる橋ならず、法の功德におのずから、出現なしたる橋なれば、へしばらく待たせ給えや、影向の時節も今いくほどによも過ぎじ。

一下りへ葉かけに休む蝶の、風に翼交して飛びめぐる、獅子は勇んで、くるくるくると、本調子へ花に戯れ、枝に臥し転び、げにも上なき獅子王の勢い、獅子の座にこそ直りけれ。

'82都民芸術フェスティバル参加公演(昭和56年度東京都助成公演)

種目	公 演 内 容	会 場	期 日	入場料金	問 合 せ 先
オ ペ ラ	モーツアルト「ドン・ジョヴァンニ」	東京文化会館 大ホール	1月30日～ 2月1日	円 7,500～1,000	二期会 (370)6441
	ヴェルディ「椿姫」	東京文化会館 大ホール	2月20日～22日	7,000～1,000	日本オペラ振興会 (371)5384
	ドゥビュッシー「ペレアスとメリザンド」	東京文化会館 大ホール	2月27日・28日	7,000～1,000	東京オペラ・プロデュース (363)5120
オ 室 一 内 ケ ス 合 奏	第12回 都民のためのコンサート 東京ヴィヴァルディ合奏団(室内合奏)	東京文化会館 小ホール	1月25日	1,300	日本演奏連盟 (437)6837
	日フィル・東フィル・都響・新日フィル・ 東響・読響	東京文化会館 大ホール外1	2月3日～ 3月6日	1,300～1,000	
	ジョージ川口とスーパーグループ 原信夫とシャープスアンドフラット	日比谷公会堂	1月26日	1,500	
邦 樂	第12回 邦樂演奏会	第一生命ホール	3月7日	1,500	邦樂連合会 (571)0216
新 劇	川口松太郎「業平～在原業平～」	三百人劇場	2月3日～14日	3,000	新劇団協議会 (944)5451 (341)8151
	宮沢 賢治「銀河鉄道の夜」	朝日生命ホール	2月8日～22日	3,000～2,300	東京演劇アンサンブル (920)5232 新劇団協議会 (341)8151
	長塚 節「土」	都市センター ホール外2	2月18日～ 3月18日	3,000～1,500	文化座(828)2216 新劇団協議会 (341)8151
	菊田 一夫「花咲く港」	俳優座劇場	3月19日～24日	3,000	仲間(368)4623 新劇団協議会 (341)8151
児 童 劇	(舞台劇) モンゴメリー「みどりのやねの朝」	八王子市民会館 外4	1月7日～31日	1,800	劇団エンゼル (307)8417
	(舞台劇) 妻田 生治「小さな虫の大冒険」	田無市民会館	※ 12月24日・25日	1,200	劇団野ばら (995)4444
	(人形劇) 庄野 英二「星の牧場」	安田生命ホール	1月9日・10日	1,800	人形劇団クラルテ (370)0489
劇	(人形劇) 「西遊記」	日野市七生 公会堂外1	2月11日～14日	1,200	日本児童演劇劇団 協議会(409)1797
	(影絵劇) シェークスピア「真夏の夜の夢」	ABC会館ホール	3月27日・28日	2,000～1,500	藤成清治とシュヌ・バントル (718)3261
	(影絵劇) 儀間比呂志「赤いソテツの実」	東邦生命ホール 外1	3月18日～22日	1,300	劇団みんわ座 (710)1061
	(ミュージカル) アンリ・ファーブル「ファーブルおじさんの昆虫記」	東京都児童会館	1月7日～9日	2,000	劇団フォーリーズ (583)9820
バ レ エ	チャイコフスキイ「眠れる森の美女」 ◎	東京文化会館 大ホール外1	2月7日～14日	3,500～1,500	日本バレエ協会 (462)5524
	「セレナーデ」「タムタム」「リラの園」 「ライモング」より第3幕	東京文化会館 大ホール	3月19日・20日	5,000～2,000	東京バレエ協議会 (723)2356
現代 舞踊	「童謡考」「譜～マグダレーヌ～」 ◎ 「黒いエクウス」	東京文化会館 大ホール	3月10日・11日	2,500～1,200	現代舞踊協会 (400)4544
日本 舞踊	第25回 日本舞踊協会公演 ◎	国立劇場大劇場	2月16日～18日	4,000	日本舞踊協会 (533)6455
能	都 民 能 ◎	東京文化会館 大ホール	1月23日	1,500	能楽協会 (574)6441
	翁付式能	宝生能楽堂	2月21日	5,500～3,000	
民俗 芸能	第13回 東京都民俗芸能大会	中央区立 中央会館	2月27日・28日	無料招待	東京都民俗芸能大会 実行委員会 (894)6923
客席 芸能	第12回 都民寄席	立川社会 教育会館外6	2月12日～ 3月27日	無料招待	都民寄席実行委員会 0423(81)5534

◎無料招待有

\*'82都民芸術フェスティバル期間外の助成公演

全体についてのお問合せは東京都教育庁社会教育部文化課 TEL(212)5111 内44-531